

今月の断酒表彰

☆ Y・Hさん 吹田支部 断酒二年

☆ O・Hさん 吹田支部 断酒四年



平成 29 年 3 月 1 日発行 No.169

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

断酒表彰おめでとうございます。

ますますのご活躍を期待いたします。

断酒に思う (75)

断酒新生！?

吹田支部 A・D

断酒会は、いろいろな職業の方がおられます。例会前に雑談である質問をすると、どなたかからすぐに返事が返ってくる。しかもかなり詳しく。

毎週合う仲間は、気さくで親戚や兄弟よりも親身になってくれる。まさに、私の人生がある時から全く違う人生(新生)に変わったようです。

私は、8年前断酒会へ入会した。当時、新阿武山病院で平野先生に初診で紹介状と吹田市断酒会の地図を渡された。それから3度目の診察で「なぜ断酒会に行かない」と怒られた。それは、この診察当日が30年ぶりの中学の同窓会があったからだ。この日の同窓会が終わってから来週行きますと返事をしたが、先生に聞き入れられず、またこれからは機会飲酒にしますということも聞き入れなかった。「今日あなたの人生が決まります」と言われた。

しかたなく、約束の同窓会には顔だけ出して恩師に挨拶と写真撮影のみ参加して会費を払い帰った。帰りに妻と吹田駅で待ち合わせて当時の例会場「吹田市民会館」へ行った。行くと人が多いのにびっくりした。何の知識もない私は、困惑していた。

すると、断酒の誓いの朗読が読み上げられ例会が始まった。体験談は、ほとんど覚えていない。ただ、各人が瞑目して体験談を聞いている姿に違和感を覚えた。「何か、変な会合に来たみたいだ」というのが第一印象だった。

その頃、私はまだ酒も止めきれず、酔わない程度に毎日飲んでいて私は、その当時の手帳に「チュウ1日1」と毎日の様に書いている。チュウは、チュウハイ1本と日は、日本酒ワンカップ(200mm)1本であった。それでも、今までの飲酒量に比べて1/3なので自分で頑張っているなど思っていた。例会の日は飲まずに行き、帰りにコンビニでワンカップ1本を買って駐車場に着いてから自家用車で飲み帰宅していた。それを、毎週の平野先生の診察で報告していた。最初は妻もそれくらいならいいかという感覚であった様だ。しかし先生は、深刻な問題であると言う。妻は、「奥さんは、どう思いますか」

と聞かれ困っていた。前の週に吹田ケーブルテレビのイベントでキャンプがあり、キャンプファイアの時にビールが出てきた。パパはかわいそうだけど1本だけと行って妻がビールを取ってきてくれたからだ。それだけ、我が家ではアルコール依存症としての知識がなかった事を思い出します。

その1ヶ月後くらいに、やっと1週間酒を止めた時會員の一人から「あんたはエライ!」と言われた。やたら褒められた。親子ほど年が離れた?方に・・・

あれから8年、平野先生の言われた通り酒を飲む友達は全くなくなったけれど、幅広い年齢のいろいろな経験者の仲間達が出来ました。例会では、上下関係もなく接してくれるこんな世界があったのだと感じています。

最初は、例会に行くのが苦痛であったのが今は行かないと落ち着かない。微力ながら何か出来ることで恩返しをしたいと思っています。

【今月の「指針と規範」】 断酒新生指針

四 お互いの人格の触れ合い、心の結びつきが断酒を可能にすることを認め、仲間たちとの信頼を深める。

一人では酒をやめられないことを認めて断酒会に入会した。例会に出席して、過去の酒害体験を赤裸々に話した。現在持っている悩みも卒直に語った。これからの人間としての在り方についても話した。しかし、断酒生活を永續させるためには、それだけでは充分ではない。

同じ悩みを持つ者同士がそれぞれの心を通わせ合い、お互いの人格が触れ合わなければ、いくら大勢の酒害者が集まって体験を語り合ったとしても、その中から収穫するものは少なく断酒そのものまで行き詰ってしまう可能性がある。

元々断酒会は、酒害者同士の信頼関係があって初めて成立した組織である。そうした人間関係にすべての會員が無関心になれば、断酒会はいっきに崩壊してしまうだろう。われわれ酒害者同士に一体感が欠けたとき、断酒も、断酒会も消失することを忘れてはなるまい。

昭和三十三年秋、完全自立を目指す断酒自助集団が高知で発足したときは、會員はわずか二名であった。ひとりで一年半酒を断っていた元政治家と、まだ酒が切れていない二十八歳の青年であった。

青年は何も考えず、元政治家をひたすら信じてついていった。元政治家は、どんなに努力しても失敗してしまう青年を、誠意と根気と信頼感でやっと断酒に成功させ、自らは酒害相談のノウハウを学ぶことができた。

やがて元国鉄助役が入会し、「やっとたどり着いた。やっと自分のいる場所を見つけた」と、感動で声を震わせた。次いで、ひとりで五年も酒を断っていた老人が入会し、「酒を飲まない仲間ができて本当によかった」と、ほっとしたように笑った。

彼ら四人は、お互いが酒害者であるということだけで、それぞれを何の迷いもなく受け入れた。すぐに一体感が生まれ、全国組織づくりの基礎をつくった。酒害者同士の信頼関係があって初めて成立した組織である、と散ていう理由がこれである。

酒に溺れ、孤独な生活を続けているうちに生まれた、自己中心的な考え方から脱出するには時間がかかる。自分のことを素直に話せるようになって、人の考え方をすんなりと認めるには抵抗がある。自分の考え方に固執しない人はよいが、そうでない人は相手の考え方を軽視したり、否定したりする。それが原因でやがて意見の対立が始まり、感情のもつれにもなる。ついには、人間関係を損う不信感にまで発展することがある。

不信感が生まれると例会に溶け込めなくなり、積極的に出席していた姿勢が崩れる。そのうち、現在断酒できているという実績だけを心の拠りどころにして、例会に出ないようになる。面白くない場所には出たくない、考え方の違う人たちとは話し合いたくないというのが、人間の持つ一般的な傾向である。

われわれは、断酒という目的はひとつであっても、異なった様々な視点を持っている。性格や生活環境の違い、あるいは、今まで生きてきた人生の捉え方まで違う。それぞれの価値観を持っているのだ。だから、自分の考え方だけが正しいという発想を捨て、お互いの価値観の差を知り、それを受け入れる努力をしよう。

われわれの断酒が継続され、人格の向上がたゆみなく続いている要因のひとつの柱に、酒害者同士の濃密な仲間意識がある。常に助け合い励まし合う友愛を、傷つけない裏切らない友情を、社会一般の人たちよりずっと重視しているところにある。そうした強い信頼関係をつくるためには、仲間たちの断酒論を理解することより、人間そのものを深く理解する方が重要である。

より深く理解しようと努力する過程でお互いの人格の触れ合いがあり、心と心の結びつきが始まる。ついには、何でも話せ、何でもわかり合える関係にまでなれる。

いまだに偏見、誤解の目で見られているアルコール依存症という病気の実体を、正確に理解しているのはわれわれ当事者と、家族を含めた一部の人たちでしかないことを考えると、われわれ仲間同士の心と心がしっかりと結びつくことは、ごく自然なことでもある。

(指針と規範 P23~P26)



【アルコール関連】

さすがアメリカ。ヒーローも一人の人間。敵は常に平和を乱す悪者とは限らない。今回はアルコール依存症と戦った2人のヒーローについて取り上げる。

アイアンマン



3本のオウンタイトルの映画とアベンジャーズ関係の映画に出演し、今や知らない人はいないアイアンマンも、原作コミックスではアルコール依存症に悩まされていた。原作コミックスではアイアンマンの正体は秘密という設定。アイアンマンはトニー・スタークのボディガードということにされており、トニーは一人二役をこなしている。その2面性のある生活のストレスをアルコールで解消していた。

『デーモン・イン・ア・ボトル』というエピソード内ではS.H.I.E.L.Dに自社を買収されかけたり、ジャスティン・ハマーがアーマーを操り他国の大使を殺害したりとの度重なるストレスでとうとうアルコールに負けてしまうトニーの哀れな姿が描かれている。

オバディアに負け、浮浪者となり全てを諦めかけていたトニーだが、偶然出会った女性ホームレスが自身の命と引き換えに子供を産んだ瞬間、生命の誕生と死に立ち会ったことにより、人としての現実と希望を取り戻す。その後は友人やスターク・インダストリーの社員の手助けで何とかアルコールを断ち切る。しかし、その後もトニーとアルコール依存症との戦いは続く。

キャプテン・マーベル

マー・ベルから能力を受け継ぎスーパーヒロインとして活躍し、アベンジャーズにも在籍しているキャプテン・マーベルことキャロル・デンバース(当時はMs. マーベルというコードネームだった)。あるイベントでコズミックパワー(宇宙規模の超パワー)を得た「バイナリー」パワーと共に活躍することになる。

しかし、バイナリーとしてのコズミックパワーを失ってしまい、その悲しみから、アルコール依存症になってしまった。最終的には同じくアルコール依存症を経験したアイアンマンに治療を助けてもらったのであった。

